



J.S.バッハ：《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》

J.S.バッハ（1685-1750）の《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》は、3 曲ずつのソナタとパルティータで構成されており、1720 年の日付がある清書譜が残されているため、おそらくそれ以前、バッハの器楽曲の名品が生まれたケーテン宮廷楽長時代（1717-23）前半の所産と考えられている。

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第1 番

全 3 曲のソナタの各楽章は舞曲名を持たず、いずれも 4 楽章構成で「緩／急／緩／急」の教会ソナタの形式をとり、第 2 楽章にはバッハの真骨頂とも言えるべきフーガが置かれている。ソナタ第 1 番の第 1 楽章アダージョは、厳粛な雰囲気の中重音を多用した旋律が淀みなく流れる。第 2 楽章には充実したフーガが置かれ、牧歌的な第 3 楽章シチリアーナ（シチリアの民俗舞曲）を経て、第 4 楽章プレストでは単旋律が無窮動的に疾走する。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第1 番

パルティータ第 1 番は、基本となる 4 つの舞曲にそれぞれ「ダブル」という変奏曲が付く。また、ジグが来るべき最終楽章にはブーレが置かれている。格調高い第 1 楽章はアルマンドとそのダブルに始まり、続く第 2 楽章はフランス語の「クーリール（走る）」に由来する舞曲クーラント（コレンテ）とそのダブル。第 3 楽章は 16 世紀スペイン発祥とされるサラバンドとそのダブル。そして第 4 楽章には 17 世紀フランス・オーヴェルニュ地方発祥とされる快速なブーレが来て、最後はそのダブルで曲を閉じる。

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第2 番

ソナタ第 2 番の第 1 楽章グラヴェは、荘重な旋律が流れるように歌い、フーガを迎える序奏の役割を果たす。第 2 楽章フーガでは三重音や四重音が用いられ、ソナタ第 1 番のフーガに比べてより緻密で洗練されている。第 3 楽章アンダンテは、重音を縫うように進むメロディの美しさに息を呑む。第 4 楽章アレグロは、16 分音符の速いパッセージから繰り出される旋律がエコーのような響きを生み出す。